

『ジャポニスム 世界を魅了した浮世絵』展関連ボランティア企画



ボランティアと一緒に楽しもう

プロローグ：ジャポニスムとは何か？ 8階

No.13 溪斎英泉 《雲龍打掛の花魁》

—世界で確認されているのは七枚のみ！
斑点入り鼈甲の簪、派手な雲龍模様の着物、濃艶で婀娜っぽさが満載。
1886年発行「パリ・イリュストレ」に林忠正が日本特集を担当しその表紙を飾ったのは北斎・歌麿でもなく英泉のこの作品。
表紙のこの作品が左右反転に記載されているのは欧米の書物が左から右、レイアウトによるもので林忠正があえて意図的に行ったのではないとも言われる。
後期印象派ゴッホはこの本を介して1887年この作品を模写し《花魁》を制作する。
(K.K)

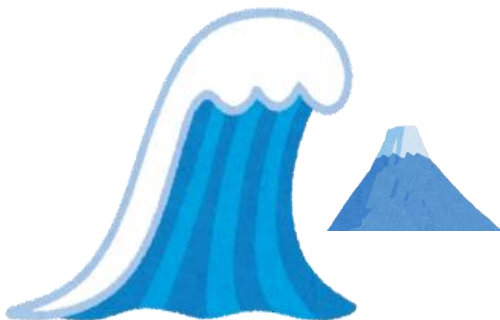


No.37 ヴァロトン、フェリックス・エドゥアール 《海》

—受け継がれる精神
ローザンヌ出身、パリのアカデミー・ジュリアンで学んだ作者は、絵画・版画の制作だけではなく文筆、演劇にも関わった。
近年展覧会が頻繁に開かれており、20世紀以降の芸術へ与えた影響についての再認識が行われつつある。
浮世絵の表現に惹かれて描かれたであろう木版画制作初期の作品であるが、一見平面的な情景の中に対象を極限まで簡略化することで生まれる余白と表現される精神性は、日本独自の美の本質を見事に捉えている。(Y.Sa)

第1章 大浪のインパクト 8階

No.47 ファリレーエフ、ヴァディム・ドミトリヴィッチ 《カプリ島、波浪》



—ダイナミックで表情豊かな波
波は岩をも削りながら引いている。押し寄せる波は逆立ち、時には大きく宙に舞い、しぶきは拡散する。
この大波を透かして遠い水平線まで波頭が続く。
手前の岩の粗さと強い色調は遠くに霞む岬と対をなし、奥行きと空気の透明感を際立たせている。
水彩画家でもある妻とのカプリ島旅行の際のスケッチを基に制作されている。細かい表現は難しいと言われているリノカット版画で波風での浸食、波の荒々しさ美しさを見事に表現している。(S.U)

第2章 水の都・江戸ー橋と船 8階



No.55 エリユー、ポール 《白い婦人》

ーフランスのエレガントな貴婦人です
細く絞られたウエストに膨らんだ袖が特徴的なドレスは、当時流行のファッションです。白い服装は光と風の風景に溶け込み、橋を下から見上げる構図から背景の青空は果てしない広がりを見せます。

作者は洗練された女性の肖像画で知られ、貴族のアリスとも肖像画を描いた縁から結婚。その姿を表した作品が多数あり、本作品も光と斬新なアングルにも関わらず、歩く姿の帽子飾りの黒と髪色の対比からモデルが妻とわかるのが微笑ましい。(Y.Su)

No.56 喜多川歌麿 《両国橋納涼》

ー隅田川の風が江戸に連れて行ってくれるかも
大判6枚の大画面。橋の上には揚げ帽子を被り日傘をさしたご婦人方。太平の世を思わせる子供を抱いた人々。欄干に肘をつきリラックスモードの美人たち。画面中央の橋の下には、江戸の名所を遠景に置き視線を誘います。涼を求めて川遊びの中、船頭も若衆姿で美しい。少ない筆数なのに今にも動き出しそうな表情や仕草に思わず観客も一緒にのりこみ、楽しみたくなります。6枚ならではの広がりを感じることができる貴重な一品です。(M.Mori)

No.83・84 歌川広重 《名所江戸百景 芝うらの風景》

ーおとなりの作品も一緒に

『みおつくし』どこかで聞いたことが、。そう、小説や映画のタイトルにも使われた！ 船の航路を示す杭。その濤標（みおつくし）が近景に大きく描かれた江戸の芝浦。

遠くを飛ぶみやこどりの群れは小さな点だが、近くの鳥たちはその視線も向きもわかるほど。浮世絵の斬新な構図は、となりに展示の印象派シニャックの作品にも影響を与えた様。

今では、みやこどりの別名“ゆりかもめ”が通る芝浦の景色と比べて見てはいかがでしょう。(S.H)

*83 前期展示(1月12日～2月6日)後摺 *84 後期展示(2月8日～3月6日)初摺

第4章 形・色・主題の抽象化 7階

No.109 溪斎英泉 《仮宅の遊女》



ー響き合うジャポニスム

吉原が火事で焼け、新たに建設されるまで、遊女たちは仮宅で営業していた。その様子を描いた本作、実は7年前の錦絵を藍摺りして再販したもの。ドイツ・ベルリンで偶然生まれたプルシャンプルーは、ベルリン藍が転じてペロ藍と呼ばれ、この頃の江戸浮世絵界を席卷した。ゴッホがなぞった溪斎英泉の遊女たち、実はそのもっと前に欧州の色に染まっていたのだ。どちらが先でも美しい。(S.A)



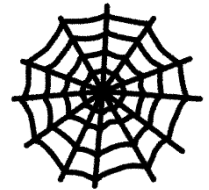
第5章 黒という色彩—影と余韻 7階

No.124 鈴木春信 《夜の梅》

—黒に魅せられて
漆黒の闇夜、まるで能の橋懸りのような廊下を歩く女性。馥郁たる梅の香りに思わず振返ったのでしょうか。春信の作品は多くの和歌や能からの主題を引用した見立ての趣向が隠されています。墨を摺り重ね画面の大部分を占める黒が、物語性をより際立たせています。大胆な構図とシンプルな色彩が、欧米の人々の目には新鮮に映ったのでしょうか。世界で本作と宝石商アンリ・ヴェヴェール旧蔵の2点のみの希少な作品です (S.N)

No.139 三代歌川豊国 《二代目尾上菊次郎の滝夜叉姫》

—忘れ去られた職人たちの超絶技巧
匂い立つほどに妖艶な姫の見返り姿、その正体は平将門の娘。親の仇を討つため丑の刻参りで有名な貴船神社へ夜な夜な通い、妖術を身に付けたという。さぞかし舞台上は熱狂に包まれたことだろう。紅を引いた唇、漆黒の長い髪、しかしここで忘れてはならないのは、滝夜叉姫を生んだ彫師と摺師の技。どうぞ近寄ってご覧ください。この時代の超絶技巧を。姫の黒髪の本一本にこもる思念を。(S.A)



第6章 木と花越しの景色 7階

No.170 歌川広重 《名所江戸百景 亀戸天神境内》

—大胆で奇抜な構図の面白さ！
近景は極端に大きく藤の花と棚の柱を拡大、そのモチーフ越しに中景は亀戸天神を象徴する太鼓橋、遠景は藤棚の下で憩う人々を描くのは近像型(近景拡大)構図。
このシリーズでは全体の三分の一がこのような構図。同じような構図は後期印象派ゴッホ《種まく人》等やゴッガン《説教の後の幻影》にも使用されている。
写真の分野では世界最高峰フォト・ジャーナリズム(マグナム・フォト) 集団はこの構図を大いに取り入れて撮影した。(K.K)

No.174 オストロウモヴァ=レベデヴァ、 アンナ・ペトロヴナ 《蜘蛛の巣》

—今日もこの世界は美しい！！
とっても小さい画面に無限に広がる景色が描かれています。
蜘蛛の巣越しに見る海辺には犬連れのご婦人、波打際に寄り添う恋人のような二人、皆思い思いに過ごしている様子。
巣が丸をつなげて表現されているのは水に濡れて水滴がついた様子でしょうか。
朝露に濡れたのか、通り雨に降られたのか。雫がキラキラ輝く蜘蛛の巣の向こうは美しい景色が広がり、今日も世界は美しい！と思わせてくれます。
かかった獲物もよい味です。(M.Su)

第7章 四季に寄り添う一雨と雪 7階

No.188 歌川広重 《東海道五拾三次之内 庄野 白雨》

—白雨（にわか雨）

日本の雨には翻訳し難い情感溢れる季語が沢山ある。浮世絵に触れ、現代人には遠くなった感性や失われた時を想い、東海道五十三次を旅する日本人もここ数年増えているとか。ノスタルジックな日本の旅に憧れるのは日本人ばかりではない。白夜の国フィンランドから来日し、各地を旅したムーミンの作者トーベ・ヤンセンもその1人。ムーミン漫画の雨は広重などの浮世絵作品との類似点を感じられる。（M.Sa）



エピローグ：江戸の面影 7階 —ジャポニスム・リターンズ

No.215 ハイド、ヘレン 《かたこと》

—彫師摺師との共作

母子愛に溢れた彼女の作品、どれも一度観たら虜になる。

この色合い、摺師にヘレン自身が細かく指示を出し忠実に表現されたもの。彫師摺師との共同制作は日本独自の古い制度だが、ハイドはそれを取り入れた。職人と手を組む事でイメージ通りの作品を作る事ができたのだ。右端にある「彫刻師松本・印刷師村田」の名に彼等との信頼関係を感じる。明治時代のシンプルな着物と江戸時代の浮世絵にみる勝山髷の組合せはハイドが求める日本人像なのだろう。（Ma.H）

No.223 キース、エリザベス 《青と白》

—ジャパン・ブルーに魅せられて

キースを魅了した日本の青。青系の伝統色は68色もあるという。

着物から鼻緒まで青と白で統一した装いは実に粹でお洒落。

柱に朝顔を巻き付ける店員の仕草にも季節の風物を見つめるキースの優しい眼差しを感じる。

暖簾、美術店の品々、葉陰も様々なニュアンスの青とそれを引き立たせる白。

窓枠や日傘の中棒、下駄の茶系色が彩りを添えている。

夏の日差しの中、豊かな青と白に包まれて女性はきっと涼し気に微笑んでいるに違いない。（M.S）



イラスト（Ma.T）

